

小規模大学における大学ボランティアセンター開設 の意義

The significance of the foundation of the Volunteer Center at a small
scale of university

人間学部人間心理学科講師 富川 拓
TOMIKAWA Taku

Keywords : ボランティア, 大学ボランティアセンター, 地域

要 約

本論では近年増加している大学におけるボランティアセンターの実態を「開設目的」「運営形態」「活動内容」の視点から概観し、小規模大学におけるボランティアセンターの開設の意義について検討した。人材面、資金面の課題と、「大学」「教職員」「学生」の3者にとってのボランティアセンターの意義の重要性が明らかとなった。

はじめに

近年ボランティア活動に対する大学の支援等の取り組みの重要性が唱えられている。大学側のねらいは2点挙げられる。1点目は、大学が地域社会の課題解決に向けて積極的に関わっていく、すなわち地域社会に貢献する機関としての存在意義を、ボランティア活動を推進していくことで、学内外ともに認識していく点である。

そして2点目は、学生がボランティア活動を通して体得するであろう、多様な人間関係の構築力やコミュニケーション能力、あるいは地域社会が抱える課題との接触や解決活動への参加による、学生の全人的な成長に期待を向けている点である。

これらのねらいを効果的かつスムーズに実践していく拠点として、大学ボ

ランティアセンターを設立し、その実践効果を高めることが期待されているのである（石井2005）。

確かに小規模校である聖泉大学（以下本学）ではボランティアセンターこそ開設されていないが、ボランティア活動を推進する動きが活発になってきており、筆者が担当する「ボランティア論」などの科目で学生が学内外でボランティア活動に参加する機会が提供されている。また筆者が顧問を担当するボランティア部の部員も積極的に各々の関心のある分野のボランティア活動に参加している。

本論ではすでにボランティアセンターを設立している大学・短期大学の現状を「設立目的」「運営形態」「活動内容」の視点から概観し、ボランティアセンターの抱える課題を検討する。その上で本校のような小規模大学におけるボランティアセンターの開設の意義について考えたい。

1. 大学ボランティアセンター

2002年の中央教育審議会の答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の「3. 18歳以降の個人が行う奉仕活動等の奨励・支援 ～奉仕活動を日常生活の一部として気軽に行う～」では、「我が国では、多くの人が奉仕活動等について興味を抱いてはいるが、一步を踏み出せないという状況にある。大学等の学生も含め、18歳以降の個人が日常的に奉仕活動等に取り組むことができるように以下のような奨励・支援の方策を検討することが求められる」と述べられており、以下の具体的奨励・支援策が挙げられている。

1) 大学等による奨励・支援 教育活動としての取組

ア) (前略) ボランティア講座やサービスマニエール科目、NPOに関する科目等を開設することが望ましい。また、複数の大学等で協力してこうした科目に関するモデルカリキュラムや教材等を共同開発することも適当である。

イ) インターンシップを含め学生の自主的な活動について、大学等において、教育効果などを勘案しつつ、大学等の単位として積極的に認定することが求められる（後略）。

ウ) こうした取組に当たっては、特定教員のみならず全学的に教職員の啓発を図り大学全体で進めることが求められる。

2) 学生の自主的活動に対する奨励・支援策

大学等においては、学生の自主的活動に対する奨励・支援策として以下のような取組を検討することが望ましい。

ア) 学生に対する学内のボランティア活動等の機会の提供

イ) 学生に対する支援体制の充実

地域のボランティアセンター、学生関係団体等とも連携しつつ、大学内において、以下のような支援体制を整備する。

a) 学生部等に情報提供、相談窓口の開設

b) 大学等のボランティアセンターの開設（専任職員、学生ボランティアの配置）

（センターにおいては、（a）学生のボランティア活動等に関する情報収集・提供、（b）学生向けプログラムの開発、場の開拓、（c）ボランティア養成講座等の開催等の事業を行うことが想定される。）

ウ) 学生が活動を行いやすい環境の整備

セメスター制度、ボランティア休学制度の実施、9月入学の促進、いわゆるギャップイヤーなど学生が長期的な活動を行いやすい環境を整備する。

エ) ボランティア活動等に関する啓発

以上の様に、答申では「教育活動としての取り組み」と「学生の活動の支援」の2つの領域でさまざまな具体的奨励・支援策の実施が大学に求められている。この中で大学ボランティアセンターの開設も重要な奨励・支援策の一つとされており、ボランティア活動等に関する情報収集・提供、学生向けプログラムの開発、場の開拓、ボランティア養成講座等の開催等の事業を行

うことが想定されている。

この大学ボランティアセンターが最初に開設されたのは1987年のことである。大阪キリスト教短期大学と、日本児童教育専門学校で開設された。その後、1991年に関西国際大学短期大学部、1993年に淑徳短期大学にボランティアセンターが、1995年の阪神・淡路大震災後には関西学院にヒューマンサービスセンターや神戸大学に総合ボランティアセンターが設立されている（山本2003）。

現在日本の大学の数は国公立と私立を合わせて568校、短期大学も同様に合わせて469校、大学と短期大を合計すると1213校となる。（注1）文部科学省の答申が求めた大学ボランティアセンターを開設しているのはこの1213校のうち、わずか46校に留まっているのが現状である（山本2003）。一つの大学が複数のボランティアセンターを設置している場合もあり、実際に設置している大学・短期大学の数はさらに少なくなるだろう。

2. 開設目的、運営形態、活動内容について

1章で触れたとおり、ボランティアセンターを開設している大学・短期大学はまだそれほど多くはない。しかしボランティア活動を重視する近年の傾向からその数は年々増加している。この章ではすでにボランティアセンターを開設している大学・短期大学の現状を、特に「開設目的」「運営形態」「活動内容」に着目し概観していきたい。組織の中で新しい部署を開設する際にはその部署が目指すところや理念、つまり目的の明確化が必要となる。また目的を達成するための具体的な活動と担い手も同時に重要と考えこの3点を中心に考察する。

2.1 明治学院大学のボランティアセンター

明治学院大学では阪神淡路大震災時の学生組織による救援ボランティア活動が契機となり、1997年にボランティアセンター室を設置している（1998年

にボランティアセンターに改組)。

1) 開設目的

開設目的は以下の3つである。

- ①社会参画体験の支援②大学の知的資源を地域社会に還元すること
- ③大学と企業の連携，学生ボランティアへのファンド提供

2) 運営形態

現在は白金・横浜両キャンパスに事務室を置き，専任コーディネーターが各1人所属し運営に当たっている。ボランティアセンターのスタッフは以下の通りである。

- ①センター長（専任教員） ②ボランティアコーディネーター
- ③事務職員 ④学生スタッフ

運営委員会の委員長は学長が務め，副学長，各学部選出教員，各部局長，ボランティア活動推進委員（教員，学生，学外の有識者・実務家）が委員となりボランティアセンターを運営している。実質的には教職員が先導しているだろうが，大学と学生が協働する型をとっていることが特徴である。

3) 活動内容

①ボランティア団体の紹介

地域の市民活動支援センターと情報交換を行う。これが主力業務となっている。

②課外活動の支援

ボランティア系サークルを対象にメンバー募集や課外活動施設の紹介等を実施している。また学生サークル，地域施設，市民ボランティア団体に関する合同説明会も開催している。

③学生スタッフの育成

④ボランティア公開講座

ノートテイクボランティア養成講座の開催している。学生と地域参加者との交流と情報交換の場を提供する。

⑤企業との連携

ア) ソニーマーケティング学生ボランティアファンド

2001年度より全国の学生を対象にボランティア活動の企画を募り、総額500万円の助成金を配分提供。活動報告会を実施。

イ) シチズンシップ・コラボレーション・カレッジ

2002年度より松下電器産業と提携しボランティア活動に関するセミナーを開催している。

ウ) 2003年度よりJスカイスポーツ・障害者向けスポーツ観戦プログラムを実施。サッカーの試合に「不登校・ひきこもり」の子どもたちを招待しその克服の手助けを試みる企画。

⑥明治学院OB・OGボランティアネットワーク

ボランティアセンターの「学生スタッフ」第1期生が2002年に発足させた。卒業後も大学ボランティアセンターとの繋がりを保つ役割を担う。

2.2 東北福祉大学のボランティアセンター

1) 開設目的

学生及び地域住民のボランティア活動の推進・支援，また大学としての地域貢献を目的とし，1998年の4月に設立された。

2) 運営形態

大学・学生協働型。学生はボランティア（団体名withボランティア）としてボランティアセンターの取り組みに協力している。

3) 活動内容

①ボランティア依頼の受付・紹介

②ボランティア・市民活動に関する情報提供

ボランティア依頼情報以外に，関係機関・団体の活動や各種イベント・研修会，ワークキャンプ等の情報を提供している。

③相談支援

ボランティア活動に関する疑問や質問あるいは活動中に悩みが生じた際に適切な支援・アドバイスが行えるよう常時相談窓口を開設している。

④講座・研修会の企画・実施

ボランティア活動の啓発や活動者・サークルのスキルアップを目的とした講座・研修会を実施している。

⑤国際協力活動への支援及び学生への啓発

体験報告会や国際協力機構（JICA）と連携した交際協力事業の紹介等を行っている。

⑥学生ボランティアとの協働

学生ボランティア団体「withボランティア」がボランティアの企画・運営に参加している。

⑦イベントの開催

⑧履修科目「福祉ボランティア活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の単位認定に関する業務

2.3 高梁学園のボランティアセンター

1) 開設目的

地域に密着した特色あるボランティアをコンセプトとし、①災害復興支援②地域貢献③国際貢献④障害学習支援という4つのセクションを設けている。高梁学園ボランティアセンターとして2001年に開設された。

2) 運営形態

大学・学生協働型で運営されている。学園センター長には高梁学園理事長があたり、専任職員2名及び学生スタッフ30名が活動している。高梁学園が経営している5つの学校（吉備国際大学等）にそれぞれボランティアセンターを有し、「高梁学園ボランティアセンター」が統括する位置づけにある。

3) 活動内容

上記の4つのセクションに関連する活動を行う。

①情報発信②相談窓口の設置③ボランティアの登録、派遣④人材育成・研修⑤関係機関、団体等の連携強化⑥活動経費の調達⑦会議の開催

2.4 その他の主な大学のボランティアセンター

その他主な大学・短期大学のボランティアセンターの「開設目的」「運営形態」「活動内容」は以下の通りである（注2）。

- 1) 龍谷大学は教育研究の一環として大学が開設した。ボランティアスタッフが関わり大学・学生協働型として運営している。ボランティアコーディネート、NPO活動支援、シンポジウムなどを開催している。
- 2) 神戸大学では地域社会における豊かでよりよい社会の実現を目指してボランティアセンターを開設した。大学公認の学生組織として運営されている。ボランティアコーディネートを行う。
- 3) 長野大学では学生のボランティア活動の推進のためにボランティアセンターを開設した。特定非営利活動法人として運営。相談受付、情報発信、イベント企画、勉強会企画、保険加入、世代間交流事業、ガイドブック発行が主な活動である。
- 4) 淑徳短期大学では学生のボランティア活動を支援するとともに、地域の様々な団体とグループとの連携と協力の下、地域に開かれた活動を展開していくことを目的としてボランティアセンターを開設した。大学主導設置型として運営されている。ボランティア情報室運営(情報提供など)、学生のボランティア活動支援、学生のボランティアグループ支援、授業(ボランティアワークへの事務補助)、図書資料の貸し出し、情報の発行、関係機関との連携などを行っている。
- 5) 関西学院大学では大学を拠点に、学生・教職員・市民のボランティア活動を推進することを目的としてボランティアセンターを設立した。大学・学生協働型として運営されている。ボランティア・市民活動の情報化支援活動、阪神・淡路大震災メモリアル企画「白いリボン運動」の実施、ボランティア活動についての相談・募集情報の収集・提供、情報誌・

メールニュースの編集，発行を行っている。

- 6) 立命館アジア太平洋大学 (APU) では学生有志で設立した公認サークルで運営されている。ボランティアセンター開設に向けて，スタッフと会員を募集しながら活動を続けている。主に他大学のボランティアセンターとの交流を行っている。学生主導型とすることができよう。

以上のように「運営形態」では「大学・学生協働型」が多く見られ，「設立目的」では「教育」「社会や地域への貢献」「学生のボランティア活動推進」「企業との連携」などがあつた。「活動内容」では文部科学省の答申でも取り上げられていた「学生のボランティア活動等に関する情報収集・提供」つまり「ボランティアコーディネート」が多く，「ボランティア養成講座等の開催等の事業」も行われているようである。

3. 大学ボランティアセンターの課題

2章で概観した大学ボランティアセンターはどのような課題を抱えているのであろうか。それらの課題を「人材」「場所」「ボランティアコーディネート」「目的」「資金」「大学の中での位置」という6つの視点で検討する(山本2003)(注3)。

1) 人材

ア) スタッフの不足

学生主体の運営の場合，スタッフ不足はボランティアセンター存続問題となる。

イ) リーダー，後継者の不在

スタッフの数はある程度確保できたとしても，組織をまとめる人物がいない場合がある。リーダーの不在である。また専門職員が配置されない場合も引継ぎなどの問題が出やすい。

2) 場所

常時窓口を開くためには場所は重要である。しかし学生が運営の主体に

なっている場合は大学との関係性の問題もあり、活動する場所を確保できないことがある。

3) ボランティアコーディネート

学生を待つだけのコーディネートではなく、スタッフがいかに学生に働きかけていくかが課題となる。

4) 目的（注4）

大学ボランティアセンターを運営していく上で、そのセンターが持つ目的が重要となる。形として表れにくいいため大学全体でコンセンサスを得ることが難しい場合があるが、目的を共有することにより、全学的な協力も得やすくなる。この全学的な協力によりボランティアセンターの形骸化を防ぐこともできるのである。

5) 資金

大学が開設している場合は、大学の資金で運営されている。学生が運営する場合は、会費や助成金で運営している。後者の場合は資金不足という課題に直面しやすい。前者の場合でも学内の予算配分の問題や、使用目的などの制限により実際の活動に支障が出る場合がある。

6) 大学の中での位置

運営の主体が大学である場合は学内組織として全学的に認知されやすく、教職員や学生の協力も得やすくなる。継続して安定した運営を行うためには全学的なサポートが必要なのである。

4. 小規模大学におけるボランティアセンターについて

前章までに大学ボランティアセンターの現状、課題を検討した。この章ではそれらを踏まえ本学のような小規模大学におけるボランティアセンターの開設について考察していきたい。2章で概観した「開設目的」「運営形態」「活動内容」と3章で検討した6つの課題に沿って本学を例として開設の可能性を見ていく。

4.1 本学の現状

本学は大学と短期大学からなり、4年制の人間学部には人間心理学科がおかれている。収容定員は400人である。また短期大学部には企業マネジメント学科と介護福祉学科がおかれ、それぞれ収容定員は160人、100人となっている。人間学部と短期大学を合わせても最大で660人であり小規模校といえるだろう。

2006年12月現在、本学ではボランティアセンターを開設していない。学内外からのボランティア依頼等の情報は、筆者を中心に授業や部活(ボランティア部には10名ほどの学生が在籍している)でアナウンスをしたり、学生部の事務職員の手によりポスター等が掲示され学生の元に情報が届けられている。一部の教職員がボランティアコーディネーターの役割を非公式に担っている状況である。

4.2 小規模大学におけるボランティアセンター開設について

本学の学則第1章総則の第1条では「本学は、教育基本法および学校教育法の定めるところに従い、高等学校教育の基礎の上に、さらに一般教養および専門教育を授けるとともに、キリスト教の精神に基づき、人間に対する理解と愛を深め、広く社会に貢献できる人材を育成することを目的とする」と定めている。

また短期大学部学則第1章総則の第1条でも「本学は(中略)世界と地域に貢献できる人材を育成することを目的とする。」と定めており、ほぼ同様の内容の目的を掲げている。

「広く社会に貢献」という表現も言い換えれば「世界と地域に貢献」と考えることができるため、本学の見学の精神に沿って考えればボランティアセンターでは世界と地域に貢献できる活動を推進することを「開設の目的」とすることができる。これは2章で見たように多くの大学で見られた目的である。しかし本学において世界に向けて大々的に活動を取り行うことは資金的な面から見てもいささか困難である。小規模大学として地域に貢献することを目

的としてボランティアセンターを運営すべきであろう。全学的にも地域と連携しさまざまな活動を行い、地域に貢献する意識が根付いており教職員のサポートも得やすそうである。

運営形態には「大学主導設置型」「大学・学生協働型」「学生主導型」などがあったが、本学では限りなく学生主導型に近い大学・学生協働型の運営形態を取ることが考えられる。小規模校である本学にとっては人材の問題が切実であり、大学ボランティアセンターを開設した場合、まずセンターに専任職員を置くことは資金的な面でも困難である。これは場所についても同様である。現状では学生部の職員も多忙なため必然的に運営の主体は学生ボランティアスタッフとなることが予想される。しかしこの運営形態でも実現は難しい。ボランティア部の部員は、基本的にボランティア活動に参加したいという思いを持つものが多い。授業等でボランティア活動をポイント化し評価の対象としていることもあり、自身が現場で活動をするを入部の動機とする学生が大半なのである。また学生数が少ないため、安定してボランティアセンターを運営するスタッフを揃えることも困難となる。

「活動内容」としてはボランティア情報を集約し、コーディネーターとしてスタッフが学生に呼びかける活動が考えられる。2章で挙げた「ボランティア公開講座」や「勉強会」は本学の総合研究所が実施している「公開講座」の中で実現可能であり、ボランティアセンター独自で開催することは人材、資金の面でハードルが高そうである。また常時相談窓口を開くといったことも人材、場所等の理由で実現は難しい。

おわりに

以上考察してきたように本学のような小規模校において規模の大きい他大学のような「運営形態」、「活動内容」をボランティアセンターに求めることは困難である。またボランティア情報を伝達することは小規模であるがゆえに現体制でも十分に可能である。一部の教職員がコーディネーターの役割の担うのである。

このような現状であえて大学ボランティアセンターの開設を検討する場合は、より一層その意義を明確にする必要がある。「大学にとっての意義」「教職員にとっての意義」そして「学生にとっての意義」の三つである。規模の大きい大学よりも人材面、資金面での問題がある小規模校の場合、これらの意義の検討作業がより一層重要となる。小さな組織の中でサポート得るためには大学にボランティアセンターを設立する意義を明確にする必要がある。教育効果を期待するのか。地域社会への貢献を目指すのか。コンセンサスが得られないうちに入れ物だけが出来上がっても、小規模校にとっては従来の体制となんら変わらない結果となるだけである。一部の教職員により運営される形だけのボランティアセンターになりかねない。3つの意義について十分に議論し、考慮することがことさら小規模校にとっては重要となるのである。

注1 「文部科学省 学校基本調査 平成18年度学校基本調査速報」より
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/06080115/006.htm
20061218取得

注2 VCTP修了生,編集責任 津止正敏,秋葉武,足立陽子「I. 立命館大学生のボランティア活動の意識・実態調査報告とボランティア活動の具体的支援—立命館ボランティアセンター設置を視野に入れて—」の内容を富川がまとめた。

注3 山本の分類をもとに富川が加筆修正した。

注4 山本は「ミッション」という表現を使用しているが本論では大学ボランティアセンターを開設している「目的」とした。理念という意味合いが「ミッション」には含まれるが、ここでは理念よりもより具体的なものとして考えたいため「目的」という表現を使用した。

参照文献

1) 石井祐里子「大学におけるボランティア活動推進の意義と課題：大

学ボランティアセンターが目指すもの」『京都光華女子大学研究紀要』,2005,181-202

- 2) 2002年 中央教育審議会 答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/001/020702a.htm 20061218取得
- 3) 山本有紀「Ⅲ. 大学・学生ボランティアセンターの現状と課題からみる将来像—8つの大学・学生ボランティアセンター事例から—」『学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ5 ボランティアケーススタディ —立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて—』2003 <http://www.human.ritsumei.ac.jp/project/archive/series/> 20061218取得
- 4) 文部科学省学校基本調査平成18年度学校基本調査速報
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/06080115/006.htm
20061218取得
- 5) 鵜殿 博喜「大学教育における社会参画体験の取込と実践—ボランティアセンターによる教育支援の試み」『大学と学生』4号, 2004年7月,17-24
- 6) 小松洋吉,渡辺信也,小抜隆「東北福祉大学ボランティアセンターの活動と地域社会との連携」『大学と学生』4号,2004年7月,48-55
- 7) 「中国地区の大学での特色ある取組—高梁学園ボランティアセンターの紹介—」『大学と学生』25号,2006年3月,55-57
- 8) VCTP修了生,編集責任 津止正敏,秋葉武,足立陽子「I. 立命館大学生のボランティア活動の意識・実態調査報告とボランティア活動の具体的支援—立命館ボランティアセンター設置を視野に入れて—」『学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ5 ボランティアケーススタディ —立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて—』2003 <http://www.human.ritsumei.ac.jp/project/archive/series/>
20061218取得